

女だと思っていた美しい
オネエさんに見染められ
ベッドで低い雄声で囁か
れながら身も心もぐちゃ
どろにされて片思いの幼
馴染から寝取られちゃう

お話

なぎさ

なぎさの妄想部屋

文庫版 / 体験版

第一章 王子様

幼馴染の斗真は、私にとって兄のような存在だ。物心ついた頃にはもう隣にいて、私が泣けば頭をぐしゃぐしゃに撫でて、転べば呆れた顔で手を引いてくれた。誰よりも近くて、誰よりも遠慮がない。それが斗真という人間だった。

「はー……ほんとお前終わってるよ。何もできないし、全然ダメ」
カフェのテラス席で、斗真が長い脚を組みながら呆れた声を出す。私がうっかりアイストラテをこぼしたのだ。紙ナプキンで慌ててテーブルを拭く私の手つきを、彼は腕を組んだまま眺めている。
「もう、そう思うならほっといてよ」

「そんな中でお前とつるんでる俺の慈悲深さがわからないかねえ」
にやりと笑うその顔は、悔しいけれど整っている。背が高くて、髪は無造作にかきあげた黒髪。服装もさりげなくセンスがいい。こういう顔と雰囲気をしているから、斗真の隣にはいつだって女の子がいた。彼女が途切れたことなんて、私が知る限り一度もない。

外面がいいのだ。私の前では辛辣な言葉ばかり並べるくせに、他の人の前ではそつなく優しい。初めて会った人はみんな「素敵な人」と言う。私だけが知っている。この男がどれだけ口が悪いのか。

でも——いざという時には必ず助けしてくれることも、私だけが知っている。

帰り道のことだった。

不意に風が吹いた。強い、春の終わりの突風。肩にかけていたトートバッグの口が開いて、中身がばらばらと道路に転がり出た。車道のほうに転がっていくそれらを、反射的に追いかけようとした瞬間。

腕を、強く引かれた。

「バカ、危ないだろ！子供かよ！」

背中がぶつかっただのは斗真の胸だった。すぐ横を車が通過していく。風圧が髪を揺らす。

「あ……ごめん」

自分がどれだけ危ないことをしたか、遅れて理解した。心臓がどくどくと鳴っている。斗真の腕がまだ私を掴んでいる。その力

はわずかに震えていた。

「……だから目が離せないんだよ」

低く落ちた声。怒っているのか、安堵しているのか、判別がつかない。

「気をつけろって言っても無駄だろうなあ」

うう……この状況じゃ言い返せない。

「まあいいや」

斗真が私の頭に手を置いた。ぐしゃ、と髪を乱される。子供の頃から変わらないやり方。

「お前らしいよな」

「それってけなしてる？」

「きまってるんだろ」

「はあ……」

ため息をつきながらも、ほっとしている自分がいる。斗真がいてくれてよかった、と思っている自分が。

でも。いい加減、離れないと。

斗真に依存しているのは自覚している。彼が近くにいるから、私は他の誰かに目を向けられずにいる。ちょっといいなと思う人が現れても、斗真と比べてしまう。斗真のほうが面白い、斗真のほうが話しやすい、斗真のほうが――。

それなのに彼には彼女がいるのだ。今も、昔も、きっとこれからも。

片思いですらない。そんな名前をつけるのもおこがましいほど、彼にとって私は「手のかかる幼馴染」でしかない。それなのに私

だけが恋人の一人もできないなんて。

不毛だ。あまりにも。



夜、ベッドに寝転がってスマホをいじる。最近ハマっているのはスマホの漫画アプリだった。

今読んでいるのは、ひどく不器用な男が、自分の想いに気づかないまま幼馴染を守り続ける話——。途中まで読んで、画面を伏せた。

こういうのがいけない。現実と重ねてしまう。

気を取り直して別の作品を開く。容姿端麗な御曹司が、偶然出

会った画家の卵に一目惚れするラブストーリー。彼は彼女の絵に魂ごと奪われて、「君の描く世界に住みたい」なんて甘いことを囁く。

……私もこんな、心が苦しくなるような、とろけるような恋がしてみたいなあ。

こんな王子様みたいな人に出会えたら。

指先で画面をスクロールしながら、溜め息をつく。漫画の中のヒロインは頬を染めて、差し出された手をおずおずと取る。二人の指が絡まって、見つめ合って、世界に二人きりみたいな顔をして。

ま、現実はそんな甘くないか。

スマホをサイドテーブルに置いて、代わりにスケッチブックを

手に取った。こんな時は絵を描くに限る。今の気持ちを、そのままぶつけよう。

絵を描くことは、子供の頃からの習慣だった。習ったことはない。ただ好きで、暇さえあれば鉛筆を走らせていた。嬉しい時も、悲しい時も、どうしようもなくもやもやする時も。線を引いて、色を重ねて、心の中にある形のないものを紙の上に降ろしていく。そうすると波立っていた感情がすうっと静まる。言葉にできなかったものが、絵になって目の前に現れる。

それが私にとって、気持ちを鎮める一番の方法だった。

友人から連絡が来たのは、ちょうど新しい絵を仕上げた頃だった。

「ねえ、今度グループ展やるんだけど、一枠空いてるの。出さない？」

友人は美術系のサークルに入っていて、時々小さな展示を企画している。以前にも誘われたことがあったが、断っていた。自分の絵は趣味で、人に見せるようなものじゃないと思っていたから。でも今回は少し迷った。あの時描いた絵が、自分でもなかなか気に入っていたのだ。

斗真のこと、恋のこと、漫画みたいな夢物語のこと。全部混ぜて描いた絵。甘い色と苦い色が溶け合って、自分でも見たことのない色彩になった。内面をさらすようで恥ずかしい。

でも——だからこそ、嘘のない絵になった。

「……出してみようかな」

「ほんと!? やった！」

彼女の声が弾ける。その勢いに押されるように、私は小さく笑った。

展示当日。小さなギャラリーには思ったより多くの人に来ていた。

壁に並ぶ絵の一枚一枚を、来場者がゆっくりと見て回る。自分の絵の前を誰かが通り過ぎるたびに心臓がきゅっと縮んだ。見られている。私の内側が、知らない人の目に触れている。

落ち着かなくて、入口近くの芳名帳の脇で、手持ち無沙汰に展示の案内状を眺めていた時だった。

——目を奪われた。

長くてつややかな髪が、歩きたびにさらりと揺れる。シルクのダークネイビーのブラウスに、脚の長さを際立たせるプレスの入ったスラックス。洗練された装いの中で、手首で揺れる華奢なゴールドのブレスレットがさりげなく光っている。

女性にしては驚くほど背が高い。それでいて均整の取れた完璧なプロポーション。纏う空気そのものが、このギャラリーの中で異質だった。

海外の人だろうか。

その人はゆっくりとした足取りで展示を見て回っていた。一枚ごとに立ち止まり、静かに眺めて、また歩き出す。品定めをしているような、けれどどこか楽しんでいるような、不思議な視線の運び方をする人だった。

そして——その足が止まった。

私の絵の前で。

見ている。じっと、動かずに見ている。数秒が過ぎ、数十秒が過ぎ、その人はまだそこに立っていた。

やがて、ぽつりと声が漏れた。

「この絵——誰が描いたの？」

低く、よく通る声だった。独り言のように聞こえたが、近くにいたスタッフが「あちらに……」と私のほうを指し示す。

視線がこちらに向けられる。逃げ出したい衝動を抑えて、私は一歩踏み出した。

「あ、私……です」

声が上がった。恥ずかしかったけれど、黙っているほうがもっ

とおかしいと思って。

「あなたが？」

その人がこちらに向き直り、目が合う。

改めて近くで見ると、その美しさは圧倒的だった。滑らかで透き通るような肌。形のいい唇に薄く引かれた色。そして何より——深い、深い青の瞳。吸い込まれそうな色だった。海の底を覗き込んでいるような、夜空の一番暗いところを見つめているような。

その瞳が、今まっすぐに私を捉えている。

「素敵な絵を描くのね」

微笑みが浮かんだ。柔らかくて、それでいてどこか見ていると落ち着かなくなる笑み。

「とても、気に入った」

「あ、ありがとうございます……！」

頬が熱くなる。絵を褒められたことはあるけれど、こんなに真剣な目で「気に入った」と言ってくれるなんて。

「よければこの後、お茶でもどう？」

「えっ！」

唐突な誘いに面食らう。いきなり知らない人と、と警戒心が顔を出す。

けれどそれと同時に、この人ともっと話したいという気持ち、胸の奥から湧き上がっていた。

あの目を、もっと近くで見たい。私の絵のどこを気に入ってくれたのか、聞いてみたい。

「あ、じゃあ……お願いします」

いつの間にかそんな言葉が、自分の口から出ていた。

それから私たちはギャラリーの近くにある、落ち着いた雰囲気のカフェに入った。窓際の席に向かい合って座る。午後の光が斜めに差し込んで、彼女の髪に琥珀色の筋を作っている。

注文を終えると、彼女は頬杖について私を見た。

「大学生？」

「あ、はい。近くの大学に通ってて……」

「絵は専門？」

「いえ、趣味なんです。小さい頃から好きで、よく描いてました」
訊かれるまま答えていく。彼女の聞き方はとても自然で、気が

つくと構えていた肩の力が抜けていた。相槌の打ち方、視線の配り方、沈黙の置き方。すべてが心地よくて、まるで水の流れに身を任せるように言葉がこぼれ出る。

「そう、それがまたいいのかもしれないわね……」

運ばれてきたカップを指先で包みながら、彼女が言う。

「とても自由で、無垢で……あなたの雰囲気とぴったり」

「えへへ、なんだか照れますね」

褒められ慣れていない自覚はある。目のやり場に困って、カフエラテの表面を見つめた。

「日頃、絵の仕入れをしているのだけれど」

彼女がカップに口をつけてから言った。

「商売の目で見てみると、だんだん目が曇りそうになるの。値が

つくかどうか、売れるかどうか、マーケットがどう動くか……そんなことばかり考えてしまう」

少しだけ眉を寄せた横顔に、思いがけない翳りが見えた。

「だからたまに、こうして色々な画廊をめぐるの。まだ値段のついていない絵を見に。純粹に、絵と向き合うために」

顔を上げて、私を見た。さっきとは違う、柔らかい目だった。

「掘り出し物だったわ」

その言葉に含まれた温度に、胸がじんと痺れる。

「あなたの絵、ずっと見ていたくらい気に入った」

絵を褒められた、というより——私の中にある、言葉にならないものまで見つけてもらえた気がした。

「ありがとうございます……！嬉しいです」

本心だった。こんな風に絵を見てくれる人がいるのだと思った
ら、描いてよかったと、展示に出してよかったと、心の底から思
えた。

「この絵を独り占めしたい」

彼女の声がほんの少し低くなった。

「……そんな風に思ったのは初めてなの。お願い、いくらでも出
すから、あの絵を売ってくれない？」

「えっ!? 私の絵を売るなんて、そんな……!」

思わず手を振った。売るだなんて考えたこともない。私の絵に
お金を出す人がいるということ自体が信じられなかった。

「私を買いたい。駄目かしら」

真っ直ぐな視線。冗談を言っている目ではない。

「ふふ……そんなこと言ってもらったの、私も初めてです」

照れくさくて、少し笑ってしまった。

「すごく嬉しいから、差し上げます。あの絵。展示が終わったら」

「……はあ」

彼女が大きく息をついた。呆れたような、感心したような表情。

「なんて欲がない子。本当にいくらでも出すのに」

「いいんです。気に入ってもらえただけで十分です」

「……じゃあ、プレゼントとして受け取らせてもらおう。今度お返

ししたいわ、その代わり」

「そんな、いいのに……」

「お願い、それくらいはさせて？」

彼女が少し身を乗り出した。ふわ、と甘い香水の匂いがした。

花のような、果実のような、嗅いだことのない芳香。

「今度……食事でもどう？ごちそうするから」

「わかりました」

断る理由が見つからなかった。

「ありがとうございます。嬉しいです！」

素直にそう言えたことが、自分でも少し意外だった。

お店を出ると、外はもう夕暮れだった。空がオレンジとラベンダーの中間のような色に染まっている。

「今日はありがとう」

彼女が足を止めて振り返る。夕陽を背にしたその姿が、一枚の絵のように美しかった。

「またね」

そう言って、彼女が距離を詰めた。

ちゅ、と。

頬に、唇の感触。

柔らかくて、温かくて、一瞬のことなのに永遠のように長く感じた。彼女の髪が頬をかすめ、花のような香りに、もう一度包まれる。整った顔が至近距離にあって、その色が、息のかかる距離にある。

心臓が、爆発しそうだった。

「ふふ、かわいい」

真っ赤になっているであろう私の顔を見て、彼女がほほ笑む。

唇の端がかすかに持ち上がって、目がわずかに細められて。大人

の、余裕のある微笑み。

彼女が手を振って去っていく。スタイルのいいシルエットが夕陽の中に溶けていく。

私はしばらくその場に立ち尽くしていた。

——普段はパリにいらって言ってたから。

きっと文化の違いだ。フランスではビズといって、挨拶代わりに頬にキスをするんだったはず。それだけのこと。大人の女性の魅力、というやつだろう。深い意味はない。ない、はず。

指先で、キスされた頬に触れた。まだほんのり温かい気がする。帰り道、ずっとそこに手を当てたままだった。



彼女の名前は珠輝。アートディーラーとして活躍していて、世界を飛び回っているらしい。名刺には洒落たフォントでフランスの住所が印字されていた。お母様がフランスの方で、生まれもパリだと聞いて、ようやく腑に落ちた。あの透き通るような肌も、海の底みたいな深い青の瞳も、生まれ持ったものだったんだ。

交換した連絡先を通じて、その日の夜から度々通知が来るようになった。

『今日はありがとう。あなたの絵、眺めるのが楽しみ』

最初のメッセージにどう返そうか、三十分も悩んだ。結局「こちらこそありがとうございました！楽しかったです」という無難な返事を送った。

そこから、やりとりは自然に続いた。

『今何してる？』

『お昼、何食べた？』

『こっちは雨。そっちは？』

他愛のない言葉のやりとり。でもそのひとつひとつに胸が弾んだ。

あの珠輝さんが、私にメッセージをくれている。あの美しい人が、私のことを気にかけてくれている。スマホが震えるたびに画面を確認して、珠輝さんの名前が表示されるたびに顔がほころぶ。

時差があるから、彼女からの便りが届くのは日本の深夜だったり、逆に早朝だったりする。枕元でスマホが光って、寝ぼけ眼で見ると『おはよう。いい夢見た？』なんて書いてある。パリの午

後の珠輝さんが、東京の朝の私に声をかけている。その距離を思うと不思議で、くすぐったくて、少しだけ切ない。

たまに珠輝さんがパリの街並みの写真を送ってくれることがあった。石畳の路地、セーヌ川の夕景、カフェのテラスに置かれたエスプレッソ。まるで絵葉書みたいに美しい風景。でもそれよりも嬉しかったのは、写真に添えられた一言だった。

『ここ、あなたに見せたいと思った』

その一文を何度も読み返した。

「お前最近、何ニヤニヤしてるんだよ。気持ち悪いな」

大学の最寄り駅前で出会った斗真が、会うなり眉をひそめた。

「ほっといてよ！」

「まさか、男でもできたか」

急に声のトーンが下がった。いつもの軽口とは違う、低い声。私は反射的に否定した。

「違うから。女の人だよ。私の絵が好きなんだって」

「ふーん」

斗真が目を細める。

「お前のあのガキみたいな絵がねえ」

「もう！そういうところが嫌なの！」

カチンときた。あんなに真剣に「ずっと見ていたい」と言ってくれた人がいるのに。それを『ガキみたいな絵』なんて。

「もう帰ってよ！」

「うるせーな、千尋のくせに生意気な」

「いいから！」

「ハイハイ」

大して気にした様子もなく斗真が背を向ける。ひらひらと手を振るその後ろ姿を睨みつけて、でもすぐにスマホに目を落とした。珠輝さんから新しいメッセージが来ている。

『今日見つけた空がきれいだったの。あなたならどんな色で描く？』

添えられた写真には、グラデーションの美しい夕焼け空。オレンジと紫と、溶けかけた金色。

怒っていた気持ち、すうっと風いでいく。

画面の中の空を見つめながら、私は知らず知らずのうちに微笑んでいた。

第二章 美女と野獣

珠輝さんが「お返し」と称して連れてきたのは、名前を聞くだけで緊張するような都内の超高級ホテルに入っている、フレンチレストランだった。

重厚な木の扉を開けた瞬間、別世界に足を踏み入れた気分になる。柔らかな間接照明、磨き上げられた銀食器、テーブルに生けられた白い花。空気そのものが上質な香りを纏っている。

落ち着かない。

椅子を引いてもらって座ったものの、背筋がぴんと張ったまま緩まない。テーブルの上に整然と並べられたナイフとフォークの

数に目眩がする。こんなにたくさん、どれをいつ使えばいいのかわ見当もつかない。

「緊張しないで。自然体でいいの」

向かいに座った珠輝さんが、グラスを傾けながら微笑む。今夜の珠輝さんは深いボルドーのドレスに、耳元で揺れるドロップ型のイヤリング。レストランの照明の下で、白い肌がいつそう映えている。

前菜が運ばれてきた。美しく盛り付けられた一皿に見とれたのも束の間、添えられた小さな銀色の器具の用途がわからない。

「あ、これはどうやって使えば……」

恥ずかしさで耳まで熱くなる。ちゃんと勉強しておけばよかった。

「それはね、こういう時に使うのよ」

珠輝さんがさりげなく手本を見せてくれる。呆れた顔一つせず、当然のように。

——あいつとは大違い。

思った瞬間、頭の中に斗真の顔がちらついた。こんな時、あいつなら「そんなのも知らないのかよ」と鼻で笑うだろう。いや、そもそも斗真とこんな場所に来ること自体がありえない。

一瞬でも思い出してしまったことを後悔する。

「千尋ちゃん？何考えてるの？」

はっと顔を上げると、珠輝さんが静かにこちらを見つめていた。蠟燭の炎が青い瞳の中で揺れている。

「あ、いえ……よく一緒にいる幼馴染だったら、こんなとこ連れ

てきても馬鹿にされてただろうなって……」

口を滑らせてから、しまった、と思った。せつかくの食事の席で、男の話なんて。

「幼馴染？」

珠輝さんが少しだけ首を傾けた。長いまつ毛が瞬く。

「そうなんです……家がずっと隣で。それで、なんか離れるに離れられなくて」

「そっか……好きなの？その子が」

ほんの少しだけ、声が低くなったように聞こえた。微笑みは柔らかいまま、目の奥だけが、すうっと色を変える。

「あ、いえ……！あいつ、彼女がいるから……だから、そういうのは」

慌てて手を振った。本当のところを覗かれそうで、語尾が逃げ
てしまう。

「そう……見る目がないのね、その男」

あっさりと、珠輝さんが言い切った。

「ふふ、そう言ってくれるのは珠輝さんだけです」

笑った拍子に、胸の奥が少しだけ温かくなった。図星のような、
それでいて救われるような、不思議な感覚。

「だったら——私にする？」

「え？」

顔を上げると、珠輝さんがこちらを覗き込むように笑っていた。
蠟燭の灯りに照らされた唇の端が、ほんの少しだけ持ち上がって
いる。見てはいけないものを見た気がして、すぐに目を逸らせな

かった。

「え、えーと……」

言葉が出てこない。冗談なのか、本気なのか。「する」って、どういう意味なんだろう。考えれば考えるほど、頬が熱くなって、視線をどこに置けばいいかわからなくなる。

珠輝さんは、急かしもしなければ、冗談にして流しもしなかった。詰まったままの私を、わずかに小首を傾げた優雅な姿勢で、ただ楽しそうに眺めている。その目から逃げたくて、グラスのふちを指先でなぞった。

やがて、珠輝さんがわずかに身を乗り出した。

「それに——私という時は、私のことだけ考えてほしいな」

柔らかい声。なのに、首を横に振るといふ選択肢が、最初から

頭になかった。

「いえ、できれば私といたない時も。ずっと」

熱を帯びた視線だった。瞳の奥に灯るものが、友情とは明らかに違う色をしている。女同士のはずなのに——胸の鼓動が、止まらない。

「あ、すみません……」

「ふふ。謝ることはないわ」

珠輝さんがグラスのワインをひと口含んで、悪戯っぽく微笑んだ。

食事を終えてレストランを出て、きらびやかなホテルのロビーを歩いている時だった。ガラス張りのエントランス越しに見える外の景色が、細かい雨に濡れているのに気づいた。

「ねえ、遅くなっちゃったし、雨も降ってるから……このまま泊まらない？」

「え？」

「上の階のスイート、とつてあるの」

珠輝さんが上層階を示すように視線を上げた。

「えええ!!ここのスイートに!!」

一泊いくらするんだろう。想像しただけで血の気が引く。

「で、でも、これくらい雨なら全然……」

「もうとつてあるんだし、せっかくだから楽しみましょう? 千尋ちゃんと、もっとゆつくり話したいな」

困った。確かに、わざわざ予約してくれたのに断るのは申し訳ない。それに——正直に言えば、まだ珠輝さんと一緒にいたいと

いう気持ちだが、胸の奥でじわりと広がっていた。

「ね？一泊だけ、思い出に」

小首を傾げて、甘い声でそう言われたら。

「……わかりました。お言葉に甘えます」

「嬉しい」

ぎゅ、と抱きしめられた。細い腕なのに力強く、あの香水の甘い匂いに包まれて、くらくらする。

通されたスイートルームは、私の部屋がいくつ入るかわからないほど広がった。

窓の外には都心の夜景が一面に広がっている。宝石を散りばめたような光の海。その手前に、クリーム色のソファ、大きなテー

ブル、花の活けられたコンソール。

そして——クイーンサイズのベッド。白いシートが、照明の下でほのかに光っている。

すごいな。こんなところ、本来なら一生かかっても来られないに違いない。

夜景に見入っていた時だった。

背中に、温もりが触れた。

「千尋ちゃん」

後ろから抱きしめられている。珠輝さんの腕が、私のお腹のあたりで交差している。背中に感じる体温、耳元にかかる吐息。

「嬉しいわ……まさか来てくれるなんて」

珠輝さんが誘ったんじゃ——という突っ込みは、声にならなか

った。

ちゅ、と耳に、唇の感触。

「ひゃっ……！」

うなじから爪先まで、ひといきに何かが駆け抜けた。耳の端を柔らかな唇がかすめて、そこから熱が全身に広がっていく。

「敏感なのね」

低く、甘い声。熱い息が首筋をなぞる。

何を考えていたのか、わからなくなった。同時に、遅まきながら理解が追いつく。

もしかして、珠輝さんは——女性同士で、こんなことを。でも、私——珠輝さんは確かに魅力的だけれど、男の人とすら、こういう経験がないのに。

「ごめんなさい、私、女の人とは……」

やっとの思いで口にした言葉を、珠輝さんの声が遮った。

「あら」

耳元で、くすりと笑う気配。

「私、女だなんて言った？」

え——。

思考が止まった。

同時に、背中に押し当てられた体の感触に、意識が向く。珠輝さんの腰のあたりから伝わってくる、硬い——熱い感触。それは、女性の体にあるはずのないものだった。

「そん、な……」

声が震える。振り返ることもできない。

「こんなに、きれいなのに……」

思わず漏れた言葉に、珠輝さんが低く笑った。

「ふふ、ありがとう。でも、生物学上はオトコなの」

耳元に落とされた声のトーンが、ほんのわずかに変わっていた。いつもの流麗な響きの奥に、甘さとは違うものが混じっている。

「だから——千尋ちゃんと、いっっぱいエッチなこと、できるよ？」

明らかに、低い声。さっきまでの珠輝さんとは別人のような声。

「——っ！」

言葉の意味を理解した瞬間、体の奥深く、芯のあたりがじんと痺れるような感覚が走った。未知の熱に当てられたような甘い痺れ。それに驚いて、弾かれたように珠輝さんの腕を振り払う。そ

のままドアに向かって逃げ出そうとしたけれど、まるで骨を抜かれたように下半身に力が入らない。

数歩進んだだけで足がもつれ、壁に手をついてずるずると崩れ落ちてしまった。

荒い息を吐きながら膝をついて振り返ると、珠輝さんがゆつくりとこちらへ歩いてくる。

「待って、待ってください、私……！」

「どうしたの？ 千尋ちゃん」

「だって、珠輝さんが、男の人だったなんて……！ 私、女の人だと思って……！」

「だから？」

「だから、じゃ、なくて……！」

「私が——怖い？」

一歩、また一歩。

「……はい」

正直に答えた。怖かった。でも、逃げようとしている自分の足が動かない理由が、怖さだけじゃない気がして、それがもつと怖かった。

「大丈夫」

珠輝さんが私の前に膝をついた。その瞳が、まばたきもせず私を映している。近い。あの、深い青が、すぐそこにある。

「怖いことは、何もしない」

「あ、あ……でも……」

「千尋ちゃん、もしかして——初めて？」

「そ、そうです……だから……！」

言い訳にもならない言葉を並べようとしたのに、珠輝さんに抱きしめられてしまった。

「嬉しい……」

声が、甘く蕩けていた。

「千尋ちゃんの初めてをもらえちゃうなんて……」

珠輝さんの顔がすぐそこにあった。紅潮した頬、潤んだ瞳、恍惚とした表情。いつもの余裕ある佇まいが崩れて、剥き出しの感情がそこにあった。

「誰にも触れられてない、私だけの千尋ちゃんに、できるなんて……」

その目に射抜かれて、私まで当てられそうになる。

「でもっ……心の準備が……」

一瞬、斗真の顔が脳裏をよぎった。それを、珠輝さんは見逃さなかった。

「まさか」

声の温度が、すんと下がった。

「幼馴染とかいう男のこと考えてる？」

「あ……」

否定しなければ。でも口が動かない。斗真のこと、あの曖昧な関係、ずるずると手放せなかった距離感——すべてが、今この瞬間、ひどく遠い場所にあるもののように感じられていた。

「彼とは長い付き合いだったみたいだけど」

珠輝さんの指が、私の顎をそっと持ち上げた。逸らしていた目

線が捕まる。

「もう忘れましょう。私が全部上書きしてあげる」

静かでいて、決定事項を伝えるような宣言だった。

「かわいいあなたを、ここまでほうっておけるような意気地のない男には、任せておけない」

その言葉が、ずっと心の隅に沈んでいた棘をすくい上げた。

斗真は、いつだって私をからかうだけで——好きとも、いらないとも、何ひとつ言ってくれなかった。けれど、彼を責められないことも、わかっている。私だって、何も言えなかった。隣にいらればそれでいいふりをして、曖昧なまま、ずるずると今日まで来てしまった。

ふたりとも、ずっと意気地がなかったのだ。

——でも、この人は違う。

珠輝さんは、たった一枚の絵から私を見つけ出して、自分から会いに来てくれた。何度も連絡をくれて、そばにいたいと言ってくれた。欲しいものを、欲しいと、ためらわずに示してくれる人。自分にはないその真っ直ぐな強さに、私はすっかり惹きつけられていた。こんな風に求められて、抗えるはずが、なかった。

「全部教えてあげるから……ね？」

珠輝さんの手が、私のお腹をゆつくりとさすった。

それだけで。たったそれだけのことで。体の奥からじわじわと熱が生まれて、思考を溶かしていく。逃げたいんじゃないのかもしれない。本当は——捕まえてほしいのかもしれない。

「あう……あう……♡」

まだ何もされていないはずなのに、その瞳に見つめられているだけで、もうドロドロに溶かされきっていた。

にこりと笑った珠輝さんに軽々と抱き上げられ、ふかふかのベッドに降ろされる。彼は、まるで大切なプレゼントのラッピングを解くみたいに、丁寧な手つきで私の服をはだけていった。布ずれの柔らかな音と、露わになっていく肌に触れるひやりとした感触が、羞恥と期待を同時に煽り立てる。

「きれい……」

「あ、はずかし……っ」

あっという間に、私は下着姿にされてしまった。むき出しになった肌に、サイドランプの光と珠輝さんの視線が同時に触れる。

それだけで、肌が熱を持っていくのが自分でもわかった。

「恥ずかしくないよ。ほら、私も脱ぐから」

珠輝さんは、自分が着ていたドレスを無造作に脱ぎ捨てる。

——驚いた。

しなやかだと思っていた身体には、意外なほどしつかりとした筋肉がついていて、引き締まっている。そして確かに、胸の膨らみはない。

やっと、現実感が出てくる。本当に、この人は男の人なんだ。

「ふっ、そんなに見つめてくれちゃって」

「あ、ごめんなさ……」

「謝らなくていいの。ほら……触ってみる？」

導かれるままに、彼のお腹のあたりに指先を伸ばす。熱くて、硬い。指の腹に伝わる滑らかな肌の感触と、奥で脈打つような力

強さに、胸がどきんと高鳴った。

「オトコだって、わかった？」

こくりと頷く私を見て、珠輝さんは満足げに目を細めた。その表情があまりに優しく、なのになどか熱を秘めている気がして、肌がいつせいに粟立った。

「じゃあ……今度は私の番ね」

珠輝さんの長い指が、私のブラジャーのレースの上をするする、となぞるように這う。その手が触れた場所から、火がついたように甘い熱がじんわりと広がっていく。肌が敏感に反応して、ぴくぴくと小さく跳ねる。

「ん……っ♡」

「すごく綺麗な形……。隠しても、柔らかくて甘い匂いがする」

下着越しに胸の膨らみを包み込まれ、指の腹でゆつくりと質量を確かめるように揉み解される。珠輝さんのしなやかな手が、柔肉をふにふにと捏ねる刺激に、頭の中がショートしそうになる。胸全体がじんわりと熱を持ち、甘い疼きが奥まで染み渡る。

「あ、あふっ……珠輝さ、だめ……♡」

「だめじゃないよ。ほら、ここ。もう硬くなってるの、わかる？」
親指の先で、ブラジャーの中央にある突起をツン、と優しく弾かれた。波のような快感が背筋を駆け抜け、思わず背中がびくんと♡と反り返る。全身の毛穴が一気に開くほどの甘い衝撃。

「ひ、ひゃああ……っ♡」

「ふふ、可愛い声……。今度は直接、見せて？」

背中にも回された手がホックを外し、ふわりと胸が解放される。

ひんやりとした夜の空気に触れたのも束の間、すぐに珠輝さんの熱い視線と手のひらが、むき出しになった柔肉を覆い尽くした。温かく、すべすべした掌が、むにゅむにゅ♡と膨らみを優しく包み込む。

「あ……はずかし、い、見ないで……っ」

腕で隠そうとする私の手首を、彼は片手で軽々と押さえつける。明らかかな力の差。抗えないという事実が、さらなる期待になってお腹の奥にずくん♡と溜まっていく。

「隠さないで。千尋ちゃんの全部が、愛おしくてたまらないの」

ちゅっ、と鎖骨に優しいキスを落とし、そのまま這うように唇が胸の谷間へと降りてくる。湿った吐息が肌をくすぐり、甘い疼きを呼び覚ます。

「んんっ……♡」

温かく湿った舌が、柔らかな膨らみの輪郭をねっとりねぶり上げ、やがて尖った先端をちゆく♡と口内に含んだ。熱い口腔の感触に包まれ、舌先でちゅぷちゅぷ♡と転がされる。時折、歯を立ててカリッ♡と甘く噛まれるたびに、首から下が小さく波打つ。

「あ……♡そこ、……ああっ！ん、ひいっ……♡」

ちゅ♡ちゅぷっ♡れろ、れろれろっ……♡

いやらしい水音が部屋に響き、ちゅうっ♡と吸い上げられる感触に、胸の先がぷっくりと腫れ上がってピクピクと震える。

「はあ……っ♡千尋ちゃん、すごく甘い……もっと、もっと味わせて……」

「だめえっ、そこ、おかしく、なっちゃう……っ♡」

もう片方の胸の先端も指でくにくに♡と可愛がられ、柔肉が指の間でむにゅむにゅと形を変えるたび、甘い痺れが全身を駆け巡る。初めて男の人に触れられる快感に、私の身体はもう自分のものじゃないみたいに震えてしまう。いつの間にか内腿が溢れた愛液で濡れてひやりとし、秘所が疼くようにうねっている。

「こっちも……そろそろね」

胸から顔を上げた珠輝さんの手が、下着越しの足の間にぬちっ♡と触れる。

「あ、そこは……っ♡」

くちゅ……♡くちゅ……♡

布越しでもわかるほど、そこはぐっしりと濡れそぼっていた。愛液がショーツに染み込み、指が動いたたびにぬちぬち♡と淫らな

水音が立つ。

「ふふ、すっかり濡れてる。期待してくれてた？」

「あ、あ、わたし、わかんなくて……っ♡」

「いいの、わからなくて。言ったでしょ、私が教えるって」

「は、はい……っ」

すり、すり、すり……♡

「あうう♡そこ、へんですう……っ♡」

「これが気持ちいいってこと。……ここは、どう？」

珠輝さんの器用な指先が、ショーツの隙間から滑り込み、敏感な突起に直接かかった。愛液をまとった指が、ぷっくりと膨れた花芽をくるくる♡と優しく包み込む。

「ひゃうう♡そこ……、触っちゃ……♡♡」

「クリも敏感ね♡自分で触ったことは？」

「な、いですうつ♡そんなところ……っ♡」

「はあ……♡なんてウブなの♡大丈夫、私がこれからいーっぱい可愛がって、気持ちいいことちゃんと覚えさせるからね♡」

「は、はひっ……♡」

それがどういうことかわからないけれど、彼の甘い声はひどく魅力的に響いた。耳の奥まで蕩けるような低音に、身体の芯がさらに熱くなる。

クリュ、クリュ、クリュ、クリュ……♡

「あ……♡ふう……♡それ、それえ……っ♡」

「イイって言って？」

「イイ、イイですう……っ♡」

「素直でかーわいい♡じゃあ……もーっと言わせてあげる♡」

ぐりゅっ、ぐりゅっ、ぐりゅっ……♡にちゅにちゅにちゅ……♡

「あ、つよいいっ……♡おかしくなっちゃう……っ♡」

「いーの、おかしくなつて、あへえっ♡てなつて可愛い顔もつと見せて？ほらこうやってぐるぐるっ♡ってしたら、どう？」

ぐりゅりゅりゅりゅりゅっ♡♡

「イイ……っ♡♡♡しよれ、イイ、れすうう~~~~っ♡♡♡んひい

い♡♡♡」

「かわいい、千尋ちゃん、スッゴク可愛い♡もっともっ気持ちよくなっちゃおう？」

クリトリスの先端を、ピンポイントで、めくるようにしつこくすり潰される。気持ちいい感覚が猛烈な勢いでお腹に溜まってい

き、甘い電流が何度も背筋を駆け上がる。

「は、はううっ……♡♡くる、くるうっ♡なんか……なんかくるうう……♡♡」

「イキそう？いいよ、イツて。ほら、イーケ——」

ぐりゅうっ♡♡

耳元に唇を寄せられ、突然の低い雄のトーンで囁かれると同時に、敏感な場所をぐりぐりと押さえつけるように甘くいじめられた。全身がびくんと跳ね、頭の中が真っ白に染まる。

「~~~~~!!♡♡♡」

ぴくんっ♡ぴくんっ♡ぴくんっ♡♡♡

目の前で火花がぱちぱちと散るような、初めての感覚。腰が

ガクガクと震え、秘所がきゅううつと収縮して熱い蜜を溢れさせる。

「あ、はひいい……っ♡♡びっくり、した……っ♡」

「はあ……なんて可愛いイキ顔……♡何度でも見たい♡」

「あ、あ……♡はずかし……っ♡」

「大丈夫、かわいいだけだから。今度は、中もしっかりほぐそう？」

濡れそぼったショーツが、粘着質な音を立てて取り去られる。

羞恥で死にそうになるが、珠輝さんは気に留めた様子もなく、再び私の秘所に手を伸ばした。ぐちゃぐちゃに濡れた花卉が、夜気の中でひくひくと震えている。

「指、ずぷずぷって入れるよ♡千尋ちゃんの処女まんこに♡」

ずりゆりゆうっ♡♡

「あうっ♡♡」

珠輝さんの長い指がつぶつぶと挿入される。初めての異物感に、狭い蜜壺がきゅうきゅうと締め付け、熱を帯びた粘膜を指に絡みつかせる。

「ん、あったかーい♡きゅうきゅうしてるの、わかる？」

「わ、わかんないれすう……っ♡♡ひ、あ……♡♡ああ♡」

「ふふ、素直じゃないわね、わかってるくせに。……ここ、いじめられると気持ちいい？」

「ふ、ふあ……っ♡♡ぐりぐりされてりゅ♡」

中の敏感なポイントを探り当てられ、ぐりぐりっ♡と優しく押される。深い場所から重く甘い快感がじんわりと広がり、子宮が

じんじんと疼く。

「気持ちいいのね。そういうとき、なんて言うんだっけ？」

「あ……♡イイ、れす……っ♡♡」

「そう、えらいえらい。もーつとよくなろうね」

ぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅぎゅっ♡♡

「ああああっ♡♡そこ、ぎゅうってされるの、イイ、イイレす

う……っ♡♡♡♡」

「ここがGスポットっていうの。千尋ちゃんが気持ちよーくなれる場所」

じーすぽつと……。知識として聞いたことはあったけれど、それが自分の身体のどこにあって、こんなにも気持ちいい感覚をもたらしものだなんて、知る由もなかった。指でぐぢゅっぐぢゅっ

♡と何度も掻き回され、愛液が溢れて結合部から淫らな音を立てる。

ぬるうううっ♡♡

珠輝さんの長い指が奥の奥へと侵入し、行き止まりにたどり着いた。子宮口を弄られるような感触に、腰が勝手にびくびくと跳ねる。

「あ、あああ♡♡珠輝さんのゆびっ、おくまで、きちやっ
た……っ♡♡」

そこをまた、ぐりぐりっ♡と押しつぶされる。さっきとは違う、深くて重い感触の気持ちよさが、腹の奥から全身を蕩けさせる。

「そう、こっちがポルチオ。さっきのGスポットと……ここを…
…私のちんぽで、どちゅどちゅ♡っていーっぱい突いてあげる。」

千尋ちゃんが、私のことだけしかわからなくなるまでずーっと♡わかる？」

「ひいんっ♡わかんにやいです……っ♡♡こわいっ♡」

「怖くないよ。気持ちよーくなつて、トロトロになつて、イクイク♡♡っていっぱいするだけだから、ね？」

いつの間にか、珠輝さんが最後の下着を脱ぎ捨てていた。そこに現れたのは……美しい顔立ちにそぐわない、恐怖を覚えるほどに雄々しく猛る、男性自身。太く、血管が浮き出た逞しい肉棒は、先端から透明な先走りを滴らせ、時折ひくり、と脈打っている。あまりの大きさと熱気に、息が止まりそうになった。

「ひっ……！」

男の人のものを見るのは初めてだけれど、どう考えても規格外

に大きいとわかる。

「無理！それ、絶対無理……！入らないです……っ！」

後ずさろうとする私の腰を、彼の手ががちりと固定する。

「大丈夫、しっかり慣らしたし、ゆっくりいれるから♡」

「う、うそ！た、たすけてえ……！」

「あは♡この状況で助けが来ると思う？……そういうところもかーわいい♡」

「くう……っ♡こわいい……っ！」

「心配しないで。すぐに何も考えられないくらい、ぐっちゃぐちゃにしてあげるから」

結局、抗う間もなく足を開かされ、熱く硬い先端があてがわれる。濡れた花卉に、ずり、ずり♡と擦りつけられる逞しい感触。

ぬるりとした愛液が混ざり合い、くちゆくちゅ♡と水音が立つ。
怖さと、それを上回るほどの期待。溶かされきった頭の片隅で、
私はもう、この人にすべてを委ねたいと思ってしまっていた。

ぐうううっ……♡

「あううううっ……♡」

すさまじい質量。やっぱり、痛い。さっきの指とは比べ物にならない圧迫感。蜜壺の奥までみっちり押し広げられ、子宮口をずんつと突き上げるような重い感覚に、生理的な涙が浮かぶ。

その涙を、珠輝さんが優しく舌で舐めとった。こわいくらい優しい笑みだった。

「大好き、千尋ちゃん」

そう囁かれて、不思議と心まで溶けてしまい、痛みが和らいだ

気がした。

ずぷりずぷり♡とゆっくり侵入してくる巨大な熱。痛みに呻く度に、ちゅ、ちゅと甘いキスの雨が降ってくる。熱い唇が額に、瞼に、頬に、唇に……優しく落とされていく。そうしているうちに段々力が抜けて、いつの間にかすっかり彼を受け入れていた。

「はあ……全部、入ったよ♡」

「は、はいった……!」

信じられない。じんじんと熱くて痛い。でも、不思議な達成感があった。腹の奥が熱く満ち、子宮がきゅんきゅんと甘く疼く。

「ちよつとずつ動かすから」

「は、はい……!」

ずるるるるう、とちゅっ♡ずるるるるるう、とちゅっ♡

「ふ、ふ、ふ……っ♡」

痛みに耐えながらなんとかやり過ごす。そうしているうちに、先ほどの指での記憶が蘇り、快感が痛みを凌駕し始める。

「ほら、さっき触ったところ、わかる？」

とちゅんっ♡♡♡

「きゃっ♡♡そこはっ♡♡」

まさにさっき教えられた場所を、硬い切っ先でわからせるように小突かれている。Gスポットがぐりぐりっ♡と押され、重くて甘い快感が腹の奥から広がる。

「ほら、こーこ。わかるでしょ？」

とちゅっ♡とちゅっ♡とちゅっ♡とちゅっ♡

「やらあっ♡♡そこやらあっ♡♡」

「ふふ、やだじゃなくて、イイ、だよね？言えないなら、お仕置きしちゃうよ」

どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡どちゅっ♡

「ああっ、ああああっ♡♡そこ、そこはらめなのおっ♡♡」

「ほら、なんて言えがいい？」

どちゅっどちゅっどちゅっどちゅっどちゅっ♡♡

どんどん早くなっていくりズム。最奥を叩き潰されるような感覚。

何かが来そうで怖い……！

「あ、ごめんしやい……っ♡♡イイれす……っ♡♡すごくイイれす……っ♡♡だから、ゆるしてえ……っ♡♡」

「はあ……ほんと、可愛いな……」

耳元で低く唸る声に、肩が小さく跳ねた。

「ご褒美に、もっともっと気持ちよくしてあげる♡♡」

「あ、うそ、そんな……っ♡♡」

どちゅんっ♡バチュバチュバチュバチュバチュバチュバ♡♡

「あああああっ♡♡らめええっ♡♡それイイのおおっ♡♡」

つま先まで力が入りきって、視界が大きく揺れた。

びくびくっ♡びくんっ♡♡

蜜壺がきゅううっとな縮し、愛液どろりと溢れ出す。

「かーわいい♡♡じゃあ……私もそろそろ出すね、千尋ちゃんのおまんこにたーっぷり私のザーメンぶっかけてあ・げ・る♡♡♡♡」

「え、あ……！　そういえば、避妊してない……！」

「ふふ、大丈夫。もし赤ちゃんできたら、結婚して、一緒に育て

ようね♡」

「う、うそ……うそっ……！だめ、だめなのに……っ♡♡」

私の足をぐつと折りたたませ、珠輝さんが深く体重を乗せてくる。これから完全に彼のものにされてしまうという予感に、ぞわぞわとした疼きがたちのぼってくる。

「じゃあそろそろ、本気で行くよ」

「うそ、いままで本気じゃ……」

ずるう………バチュンツツ!!♡♡

「ひ……ッ、ひあああ♡♡」

重く、深すぎる突き入れ。そしてそれで終わるはずもなく――

バチュツ!!!ドチュドチュドチュドチュ!!!♡♡♡♡ドチュンツ♡♡

「あああああ♡♡♡はげ、はげひいっ♡♡むりいっ♡♡」

「こら、無理じゃないでしょ？悪い子はどうだよ？」

ドチュンッ♡♡ドチュンッ♡♡ドチュンッ♡♡

躡けるように、重く正確なピストンが続く。子宮口を何度も抉られ、甘い痛みと快楽が混じり合って全身を駆け巡る。

「あ~~~~っ♡珠輝さんっ、珠輝さんっ♡♡ごめんなしい♡」

「いいわね、そのまま私のことだけ考えて、イケよ——」

ぼちゅっぼちゅぼちゅぼちゅぼちゅっ!!!♡♡ぼちゅんっ♡♡

ラストスパートの容赦ない連打で、中がめちゃくちやに掻き回される。再び、抗えない快感の濁流が押し寄せてきて——。

「いく、いくう……♡イクイクイクッ♡♡イクのおおっ♡♡」

「あーっ、私もでる……っ♡千尋ちゃんのまんこに、びゅーびゅーだす……!」

びゅっ♡♡びゆるうううっ♡♡びゆるるるっ♡

同時に、すさまじい勢いで最奥に熱い飛沫が叩きつけられる。子宮がたぶん♡と満たされてなお、はくはくと出されたものを貪欲に飲み込む感覚が信じられない。

「あーっ♡♡ナカ、だされちゃ、いっぱい……っ♡♡」

「はあ……さいっこうだった……♡もうこれ離せない。絶対はなせない、——離せねえ……」

突然漏れ出た雄の低い声に、びくんつとまた反応してしまう。

けれど、もう逃げ出す気力なんて残っていないかった。再び降ってきた甘いキスの雨と、私を閉じ込めるような強い腕の抱擁に、僅かな警戒心もあっさりと熱に溶かされていく。されるがままに甘く溺れながら、私は抗いようのない深い眠りへと引きずり込ま

れて
い
つ
た。
。